

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320068

研究課題名(和文) 芸術表象における変容とオリジナリティ：創作のストラテジーとしての翻案研究

研究課題名(英文) Transformation and Originality in Representation: Adaptation as a Strategy of Creation

研究代表者

楯岡 求美 (TATEOKA, Kumi)

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：60324894

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,700,000円

研究成果の概要(和文)：従来上位に置かれる翻訳をオリジナルとの親和性を最重視した翻案の一種として捉えた。欧米でも翻案こそが文化の歴史的変容を推進する機能を果たし、新規さを重視しないことでポストモダン以降の閉塞を打破しうる。一般に受容初期には既存の様式に合わせて翻案され、オリジナルとの違いは強く認識されない。芸術性の物差しがオリジナリティに特化されたのは、個性を作家の独創性に見たモダニズム以降の限定的現象である。文学作品を映画化・演劇化するメディア間翻訳においても、各メディアの言語特質に即して積極的誤読ともいえる大胆な切り取りを行う翻案が、かえって原作の矮小化を免れる創作手法となりうる。

研究成果の概要(英文)：In this study we deal translation that has been placed in the upper far as a kind of adaptation that emphasizes the most similarity with the original. Adaptation is played a function to promote the historic transformation of culture in Europe. Adaptation is strategically useful to break down the postmodern obstruction, because it does not focus on newness. Usually, in the receiving initial when the foreign cultural products are adapted to fit the existing style, the difference between the original and adaptation will not be strongly recognized. It is historically limited phenomenon that the artistry has been specializing in originality, only after modernism who especially emphasizes the individuality of the artist.

Also in the media-adaptation like between the literary works and cinematic-theatrical works, each medium should not just shorten the story but extract the essence which is suitable for unique representation for its own language.

研究分野：ロシア文化史

キーワード：翻案 翻訳 創作手法 オリジナリティ メディア間翻訳 近代化

1. 研究開始当初の背景

時空間を超えた文化受容に際して行われる翻訳や翻案の作業もまた、語順や音感など、なんらかの変化を伴う越境行為である。

近年、翻訳研究においてもすでに、オリジナルを変えることなく異なる言語に移し変えることが不可能であることは前提となっている。マルチ・メディア時代を迎え、広い意味で翻訳概念が捉えられるようになってきている。カノンである『源氏物語』や『カラマゾフの兄弟』などの古典作品がマンガや宝塚の舞台として加工されるのも翻訳の一種と考えることもできる。しかし、このような改作を、原作の矮小化や「翻訳」の派生形として考えるのではなく、新たな創作としてもっと積極的に評価することを通して、新たな創作が困難な現代芸術において、突破口を見出すことができないだろうか考える。

わかりやすさを重視する古典の新訳やマンガ訳が相次いで刊行され、古典再読の機会が広く与えられる一方で、翻訳における読みやすさと、原文からの「正確さ」をめぐる古典新訳が出されるたび、相変わらず激しい議論が起きる。プーシキンが駅馬車の馬に例えたような、原作者の真の意図を正確に読者に橋渡しする黒子の役割に翻訳者を限定する見方はいまだに根強く、グローバル化の時代、翻訳の重要性はさらに増しているが、機械翻訳に関心が移ったことも「正しさ」への関心に議論が集中しがちな原因となっており、創作・創造(想像)の可能性を狭める結果となっていることは否めない。このような翻訳観は、「文化翻訳の不可能性」を強調することにつながり、相互理解が目指されているはずの「多文化主義」がかえって相互無理解や不干渉を良しとする文化相対主義的な考え方を引き起こすのと共通する問題を抱えている。

確かに新しい作品の翻訳など、ある種の正確さが求められる分野は存在するが、人間が何らかの情報を受け取ったとき、ロトマンの言うように、しばしば誤解(誤訳)や連想によってオリジナルとは異なるものを発想し、それが歴史的にも豊かな創造を生み出す契機となってきた。シェイクスピアの『ハムレット』やゲーテの『ファウスト』など、世界的な規模で影響を及ぼすこれらの古典作品も、専攻作品を有する翻案という側面を持つ。

しかし、現状では、多くの場合、作品評価はオリジナリティの評価に直結しがちで、かろうじて「翻訳」または「メディア間翻訳」のジャンルばかりが評価対象として取り上げられ、かえって創作の可能性が捨象されてしまう結果となっている。

時代が変われば見方も変わるように、メディアが変われば、表現されるテーマも変

わる。しかし、映画化やマンガ家など、異なるメディア表現も含め、翻訳と言う概念は広くとらえられる一方で、翻訳における読みやすさと原文からの「正確さ」を巡って現在でも激しく議論されている。

製作者もまたクリエイターである以上、ドキュメンタリーでさえも、オリジナルな視点が含まれていない作品はない。演出家メイエルホリドは、演劇における創作者は演出家である、として、戯曲や原作テキストを盲目的に再現する演劇手法を非難したが、現在でも舞台作品や映画の原作への忠実さがしばしば話題になる。しかし、大幅に改作されていても良質なものが問題になることはない。逆に原作どおりであるかのように表記することで、読者が多様な読みの可能性を追求せず、受容の画一化へとつながる弊害も危惧される。

創作者側としても受容する鑑賞者側としてもこのような閉塞的状况を打破する方法が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、越境の可能性(相互理解)よりも、越境が引き起こす変容に着目し、従来、副次的にしか扱われてこなかった翻案について、その種類や方法について時代的文化的比較を通して明らかにし、創作手法としての将来的な可能性を明らかにすることを目的としている。

背景でも述べたように翻訳の中でもオリジナル作品を形式的、内容的に加工したものは「翻案」と呼ばれ、習作など完成度の低いもの、簡略版などとして低く評価されがちだが、ロトマンの言うように、しばしば誤解(誤訳)や連想によってオリジナルとは異なるものを発送することが歴史的には豊かな想像を生み出す契機となってきた。

20世紀以降に目を向ければ、複製技術の発展によって文学を含む芸術作品の創作技法も受容・消費の方法も大きく変わり、シュミラクル的事象の捉え方や「すでにすべては書かれている」と新たな創作表現の不可能性を標榜するポストモダン以降、創作の新奇性およびオリジナル性自体を重視する価値観への懐疑が生まれている。

このような状況下、真偽の対立軸を越え、無限のヴァリエーションを生み出す創作方法として、「翻案」を現代の創作の中に改めて位置づける必要がある。

3. 研究の方法

本研究は国内研究会と国際研究集会の二つのセクションに分けておこなった。国内研究会においては、基礎的な情報収集と分析法の検討を行い、基本的にはコアメンバーを中心とした勉強会として展開した。

国際研究集会は、「翻案」という概念の地域的な差異等を検討することも視野に、海

外から研究者を招へいし、国内の研究者から広く参加を募って研究交流の活性化を目的とした。海外調査を行ったメンバーによる調査成果の共有化および若手研究者に国内外の研究に直接触れる機会の提供も目的とした。

中心となったテーマは

(1) 日本の近代化プロセスにおける翻訳と翻案に関する研究

(2) ジャンル間翻案の可能性：記憶の映像表象および文学作品の映像アダプテーションの諸問題

(3) 異文化受容におけるオリジナル加工の問題：芸術制度の翻訳と疑似創作

4. 研究成果

(1) 明治期には工業化のための産業技術、政経軍事制度等の社会制度と平行して、欧米からの文化摂取も積極的に行われたが、その際、ヨーロッパの終焉に位置し、同じく王制を掲げながら急速な近代化を求められていたロシアとの社会意識の親和性から、ロシア文学の翻訳が積極的に行われた。二葉亭四迷が言文一致および近代的小説の構成を日本文学に導入する実験的試みとして翻訳したトゥルゲーネフ等の諸作品が有名であるが二葉亭の翻訳はすでに原作のオリジナル性を重視した文化紹介となっていた。最初期の翻訳である『花蝶』は民衆反乱をあつかう歴史小説であるプーシキンの『大尉の娘』の物語のうち、登場人物間の恋愛エピソードに特化し、かつ原作にはない端書等が加えられている。あきらかな翻案に見えるが、翻訳者の意識としてはオリジナルに「忠実」な翻訳を目指した画期的な試みを自負し、実際の内容との矛盾を呈している。翻訳者の意図を離れて、監修者による介入があった可能性が高いものの、提示された翻訳・翻案作品は題名も含め、江戸末期の散文作品の形式を踏襲している。このことは、新しい文化が流入する際、すべての要素の逐語翻訳的受容が行われるのではなく、まずはテーマ、言語選択、構成等において受容される側の文化的ルールに即したものがピックアップされる形で認識され、徐々にスライドするように新たな技法が応用・受容されるようになることを示している。

(2) ジャンル間翻案の可能性：記憶の映像表象および文学作品の映像アダプテーションの諸問題

トーマス・ラファーセン教授(トロント大学)の従来の研究論文と平行して映像作品を作成するという実践は、文化研究の方法を考える上でも示唆に富んでいる。2012年、2014年に京都・神戸で行った上映会で、ソ連崩壊後に内戦を経験したクルグスに取材した『狭間の国』、ソ連期の映画普及運動を取り上げた『失われた映画の国』、ソ連建

期の新都市建設を扱った『愛のコムソモースク・ナ・アムーレ』、旧満州を舞台とした文化混交を扱った『ハルビン』は研究者としての方法論を応用し、過去の映像アーカイブの掘り起こしや当事者の回想インタビュー等を記録と分析とのハイブリッド的アプローチの試みを提示した。

戦争と革命に関連するロシア・ソ連映画を取り上げたマクシム・パヴロフ元ロシア映画博物館副館長の上映付き講演会を2013年に京都・神戸・東京、2014年に山形・東京・神戸において行った。アニメーションやモンタージュを含む映画制作手法の発展に社会変動が大きく影響を及ぼしていること、キリスト教的モチーフはソ連期においても頻繁に使用されたものの、宗教的心情の表明と言うよりも、ヨーロッパ文化の根幹を成すメタファーとなっているがために、製作者にとっても観客にとっても理解しやすい図像として採用されていることが示された。

メディア間翻訳としての典型は文学作品の映像化であり、漫画等の新しいジャンルも含めれば現在でも主要な映画制作方法のひとつになっている。しかし、その量に比して質的に高く評価され手いるものが少ない。例えば『アンナ・カレーニナ』は世界中で映像化されているが、互いに似通っている感否めない。長編小説は19世紀に断片化された社会の諸相を総合して世界を示す構造を有している。逸脱するエピソードの集合体である小説が外界からは見えない内面を言語によって推量することに特徴があるとすれば、過不足なく筋立てをダイジェストする方法を取る限り、映像化が繰り返されたところで差異は生まれにくい。アンジェイ・ワイダ監督の『悪霊』はカメラが事件を取材する目撃者という設定となっており、原作者の描く世界を相対化し、独立した創作品となっている。

(3) 異文化受容におけるオリジナル加工の問題：芸術制度の翻訳と疑似創作

言語芸術において、とりわけ詩というジャンルは言語文化ごとの規則が厳格であるとともに形式と内容とが不可分とされる分野であり、翻訳の不可能性を論じる格好の材料となっている。ヘンリケ・シュタール教授(トリア大学)を招いて行った翻訳を巡る研究会では、ドイツ語のパウル・ツェランの詩のポーランド語、英語、ロシア語翻訳の比較を行った。シュタール教授は詩を翻訳する際に重視されるべき点として言語的意味、文化的背景に規定される間テクストの意味、詩形式としての洗練のほかに、翻訳者がより客観的にオリジナルの言語表現を重視するか、主観的に詩表現を受容側の文化にあわせるかという観点から評価を行った。すべてを満たす奇跡の翻訳は稀であり、オリジナルの形式

の特徴を残そうとすれば、受容側の文化表現には異質なものを取り入れることになり、原語ではごくオーソドックスな表現が、翻訳ではきわめて前衛的・実験的な表現に見える矛盾も起きる。翻訳をオリジナルとの相違で順列を付けるのではなく、オリジナルへのある種「返歌」として詩作品の総体として成り立っているかどうか、と言う観点が訳詩の評価において重要ではないかと提起した。

日本でも古典の現代語訳を巡ってオリジナルへの忠実さが問題になると同時に、落語調訳、若者言葉訳など、多様な言語様式への翻訳というより翻案に近いものが目立つ。特に古典は多数の異なる翻訳が時代を超えて出版されてきた中、実験的に翻訳も言語創作の可能性を拡張する試作品となっている。

これまで翻訳者は黒子的立場に徹していたが、今後は翻訳者もまた表現者としての主体性を獲得し、翻訳の多様性・創造性が評価されていく時代になると考えられる。

以上から、翻案にはオリジナルとの対話的關係性があることが明らかになった。選考する創作に対し、時に細かな、時に大胆な差異を付加し、無限にヴァリエーションを作り上げることにより、創作活動を拡張していくことができる。

この際、問題になるのは、翻案と剽窃の境界をどのように考えるかということであろう。IT化時代を迎え、一方で複数の人間が共同で作品を加工することを前提とする個としての著作者不在の創作法が広がっているが、他方、コピーによる著作権の侵害もまた大きな問題になり、翻案とオリジナルのせめぎ合いはより激化しているともいえるだろう。権利の主張は情報過多(メディア過多)のためにオリジナルの確定がより難しくなっていること、創作が個性の発露として人格と結びついていること、プロの創作者は作品の制作は販売と結びつく経済活動となっていることが主とした理由であると考えられる。現状では翻案作品は加工のための素材への費用が掛かる高価な創作方法でもなる。これらの問題については社会システムも含めた大きな問題であるため、本研究では指摘するにとどめる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16件)

木村崇「境界なき空間 時代的事象としてのポロジノ」『境界研究』No.2, 2011, 1-29頁。

GRECKO, Valerij Inszenierung der Geschichte: Ostalgie, fingierte Zeit und ihre mediale Darstellung, "Dogi Imunhak(Korean Journal of German Literature)", No.52(4), 2011,

pp.149-162.

ヨコタ村上孝之 "The Creation of 'A Lady': Gender and Sexual Politics in the Earliest Japanese Translations of Walter Scott and Charlotte Brontë." Re-engendering Translation: Transcultural Practice, Gender/Sexuality and the Politics of Alterity. Ed. Christopher Larkosh. Manchester, UK: St. Jerome, 2011. Pp. 91-110.

ERMAKOVA, Liudmila 「横光利一作『春は馬車に乗って』『神馬』『蠅』ロシア語翻訳および『第四人称から...』」『外国文学』2月号(モスクワ) 2012, 191-216頁。(ロシア語)

GRECKO, Valerij "звук и значение в современной русской поэзии: сто лет после футуризма." «Image, Dialog, Experiment; Felder der russischen Gegenwartsdichtung»(ドイツ), 2013, pp.77-90.

Татеока Куми "О Японских фильмах и спектаклях" «Диалог армянской, русской и японской культур»(アルメニア), 2013, pp.124-134.

木村崇「ポロジノという絆：トルストイ、レーンモントフ、プチャーチンを結ぶもの」『緑の杖』10号、2013年、1-26頁。

増本浩子「言語への会議とコミュニケーション不全 ホフマンスタール、カフカ、デュレンマット」『DA』8号、2013年、71-79頁。

KIMURA, Takashi Перспективы изменения образа России в Японии // «Япония и Россия, Национальная идентичность сквозь призму образов», «Петербургское Востоковедение», Санкт-Петербург, 2014, С. 224-243.

木村崇「明治維新前後生まれの日本知識人がイメージしたロシア—二葉亭四迷と内田良平の場合—」『日口関係 歴史と現代』(法政大学現代法叢書 39)法政大学出版社、2015年、41-67頁。

北村結花 "Girls' Manga and Girls' Culture: Beyond Age and Gender" Haruo Shirane, Tomi Suzuki, David Lurie eds. *Cambridge History of Japanese Literature*, Cambridge University Press, 2016年(刊行予定)

[学会発表](計 18件)

GRECKO, Valerij «Политическая цензура и русские переводы Станислава Лема» Станислав Лем国際シンポジウム、神奈川大学人文研究所、2011年6月18日。(招待講演)

GRECKO, Valerij «Jstalgie und ihre mediale Darstellung»第18回ソラク・シンポジウム、韓国独文学会、2011年10月2日。

MASUMOTO, Hiroko «Die Atombombe als literarischer Topos in der deutschsprachigen und japanischen Literatur», University Toria, 11th December, 2012.(Invited lecture)

木村崇「心象風景としてのポロジノ」東京大学、2013年2月9日。(招待講演)

KIMURA, Takashi «Восприятие

художественного текста с культурно чуждой структурой», 東アジア ICCEES, 大阪経済法科大学, 2013年8月9日。

TATEOKA, Kumi «Структурная общность экранизации «Анны Карениной» 東アジア ICCEES, 大阪経済法科大学, 2013.8.9.

MASUMOTO, Hiroko “Was man wirklich wollte: Volker Braun vor und nach der Wende”, Russian State University of Humanities, 2013.5.28. (Invited lecture)

MASUMOTO, Hiroko “Gleichnis des Lebens: Geschichte der literarischen Stoffe als Autobiographie Dürrenmatt,” Humboldt-Kolleg Kyoro 2012, 2014.3.2. (Invited lecture)

植岡求美「ロシアにおける第一次世界大戦の芸術表象」(シンポジウム「第一次世界大戦とロシア」JSSEES, 岡山大学, 2014年10月5日(招待報告)。

植岡求美「レールモントフ『仮面舞踏会』における女性表象と映像化・舞台化の問題」日本ロシア文学会, 2014年11月1日。

木村崇「古い外国海図に見る沖縄の島々 - そこから何が読み解けるか」那覇自治会館, 2014年2月28日。(招待講演)

KIMURA, Takashi "Место переводов лермонтовской поэзии в японской переводческой традиции русской литературы" Международная видеоконференция: «Поэзия Лермонтова и других русских поэтов на языках мира: общее и особенное» Институт русской литературы РАН. 2015.3.5.

〔図書〕(計 14 件)

グレチュコ, ヴァレリー 『ロシア文化の方舟』東洋書店, 2011年, 全 408 頁(共著 303-311 頁)。

エルマコーワ, リュドミラ 『七五調のアジア 音数律から見る日本短歌とアジアの歌』2011年, 全 290 頁(共著 245-252 頁)。

Kimura Tadashi «Культурный палимпсест», Nauka(モスクワ), 2011(共著 228-241 頁)。

ヨコタ村上孝之『金髪神話の研究—男はなぜブロンドに憧れるのか』平凡社, 2011年, 全 260 頁。(単著)

木村崇『ヨーロッパ文化の光と影』勁草書房, 2012年, 全 285 頁(共著: 53-84 頁)。

グレチュコ, ヴァレリー 『ロシア人が日本人によく聞く 100 の質問』三修社, 2012年, 全 271 頁。(共著: 担当 全頁ロシア語部分)

グレチュコ, ヴァレリー 『再考ロシア・フォルマリズム 言語、メディア、知覚』せりか書房, 2012年, 全 225 頁(共著 97-109 頁)。

エルマコーヴァ 『神道: 文化の記憶と生きている信仰』AIRO-XXI(モスクワ), 2012年, 全 236 頁(ロシア語、共著 29-51 頁)。

TATEOKA, Kumi GRECKO, Valerij MASUMOTO Hiroko ICIN Kornelia and et. «СВЕТЛОСТ СА ИСТОКА» Beograd University, 2013, 361p (共著 TATEOKA pp.187-193, GRECKO pp.300-309 MASUMOTO pp.143-149)。

ヨコタ村上孝之『二葉亭四迷』ミネルヴァ書房, 2014年, 全 302 頁。(単著)

Kitamura, Yuika Tateoka Kumi and et. «Finding in Translation», Beograd University, 2015.(printing) (科学研究費基盤(B))「芸術表象における変容とオリジナリティー: 創作のストラテジーとして翻案研究」報告書、共著、2015年8月出版予定、全 220 頁予定)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)
取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植岡 求美 (TATEOKA Kumi)
神戸大学・大学院国際文化学研究所・准教授
研究者番号: 60324894

(2) 研究分担者

北村 結花 (KITAMURA Yuika)
神戸大学・大学院国際文化学研究所・准教授
研究者番号: 10204918

増本 裕子 (MASUMOTO Hiroko)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号: 10199713

グレチュコ ヴァレリー (GRECKO Valerij)
東京大学等・非常勤講師
研究者番号: 50437456

エルマコーワ リュドミラ (ERMAKOVA Liudmila)
神戸市外国語大学・名誉教授
研究者番号: 70316032

木村 崇 (KIMURA Takashi)
京都大学・名誉教授
研究者番号: 80065234

(3) 連携研究者

ヨコタ村上 隆之 (YOKOTAMURAKAMI Takayuki)
大阪大学・言語文化研究科大学院・准教授
研究者番号: 00200270